

マルコによる福音書 13:1—13

「惑わされないように生きるために」

2026年5月3日(主の日)

藤沢北教会牧師 長倉基

現代社会に生きるわたしたちは、さまざまな面での変化の中に置かれています。医療など様々な良い変化もありますけれど、社会においても身の回りのことでも今まで思いもしなかった変化が起こり、この先どうなるのだろうという不安も抱えています。国内・国外の情勢が思わぬ方向へ進み、分断が深刻化し、戦争が終わらないどころか新しいものが始まっています。自然災害に対しても、対策は進んでいるかもしれませんが、いつ何が起こるかもしれない、という緊張感の中に置かれています。こういう不安をあおるのが、フェイクニュース、偽情報であるというのが現在の特徴ではないでしょうか。噂が世に広がるのは昔からかもしれませんが、SNSによりその速さと範囲、影響力はこれまでの比ではありません。内容も画像どころか映像までもいかにも本物のように作ることができます。あふれる偽情報がわたしたちの不安をさらに大きくし、振り回しまわします。このような状況に置かれているわたしたちに、主イエスは極めて現実的で、しかし、偽情報に振り回されずに信仰によって歩む、生きることへの希望を与えてくださいます。

マルコによる福音書をここまで日曜日ごとに聞いてきまして、今日第13章に入りました。ここで主イエスは弟子たちに、神殿の崩壊の話題をきっかけにして、世の終わりのことを弟子たちにお語りになります。「私の名（つまり主イエスの名）を名乗る者が多く現れる」ですとか、地方法院に引き渡されて会堂で打ち叩かれる、総督や王の前に立たされる、など、あまり親しみのない話のように思えるかもしれませんが、けれども、この福音書全体を見ると興味深いことがわかります。ほかの福音書とちがって、主イエスが直接語られる教え、つまり説教がかなりすくないのです。第4章に神の国のたとえが5つ語られています。そしてもう一か所主イエスが集中的にお語りになっているのがこの第13章なのです。そしてもう主イエスはこの後逮捕され、十字架におかわれますから、弟子たちにお語りになるのは最後です。ですから、ご自分の死を前にして最後に、このことだけは伝えたい、主イエスは思いをこめて弟子たちにお語りになったに違いないのがこの第13章に書き記されている終わりの日に関する説教なのです。この福音書を書いたマルコもまた、この主イエスの熱意を書き残そうと一生懸命この文章を記したに違いありません。

主イエスと弟子たちは、毎日神殿に通い、夕方には境内を出てベタニアという村の宿に泊まっています。今、境内を出て振り返って神殿を少し遠目に見た弟子が主イエスに言いました。「先生、ご覧ください。なんと見事な石、なんと立派な建物でしょう」。主イエスと弟子たちは昼間は神殿の中でユダヤの指導者たちと激論を交わす中、彼らの殺意の高まりを感じていました。けれども、神殿そのものは大変立派であり弟子たちはその神殿に見とれるほどでした。けれども主イエスはおっしゃいます。「この神殿は、いずれ崩れ落ちる」。弟子たちはこの発言の真意を測りかねたことでしょう。神殿はユダヤの民のよりど

ころであり、それが崩壊するなどとは、弟子たちですら想像ができなかったはずで、けれどもなお、主イエスがそうおっしゃるなら、と思い尋ねます。「そんな大変なことが起こるとするならば、どんなしるし—前ぶれ—があるのでしょうか」。けれども主イエスのお応えは、神殿とは無関係のことでした。「この神殿は確かに崩れ落ちるだろう。ここにはもはや祈りがいないからだ。しかし、これよりももっと大切なことがある」。とおっしゃいます。それは「人に惑わされないように気をつけなさい」ということだとおっしゃいます。

このマルコによる福音書が記されたのは、主イエスの時代から約 40 年後のことです。主イエスが語られた一つ一つの事柄をどのような思いで弟子たちが受け止めたのかははっきりとはわかりません。けれどもこのマルコによる福音書を読んだ教会の人たちにはよくわかったに違いないのです。なぜなら、この神殿の崩壊、そしてここで主イエスが弟子たちにお語りになったことは実際に起こったこと、起こっていることだからです。実際、紀元 70 年、エルサレムの町はローマ軍に包囲され、神殿は破壊されてしまいます。「戦争の噂—ニュース—を聞く」。この神殿の破壊が起こったように、ユダヤとローマの間には大きな戦いが何度も繰り広げられていました。「民族は民族に、国は国に敵対して」いたのです。地震が頻繁にあったであろうことは新約聖書からもわかります。自然災害と戦争は飢饉をもたらします。この時代、キリスト者はユダヤ教から追い出され、またローマ帝国、皇帝からも迫害されていました。二重に迫害されていたのです。ですからキリスト者は人の目を気にしながら生活をし、こっそり隠れるように集まって礼拝をしていました。見つかったらユダヤの会堂で打ち叩かれ、またローマの総督—総督とまではいかなくても—役人にとらえられて尋問されました。まだ広がり始めたばかりでしたから、家族の中で自分だけが洗礼を受けて信仰者になった人が多くいました。そうすると家族の一人がキリスト者であることがばれたら、家族にも被害が及ぶと思い、兄弟を密告し、子供を追い出す、親を売る、そういうことが起こりました。ローマで起こった大火事をキリスト教徒のせいにして多くの人々が殺され、その後も多少収まったとはいえ、公にキリスト者であることを告白すれば逮捕され尋問されるような時代でした。それでもこの時のキリスト者たちは礼拝を文字通り守り、信仰生活をつづけました。礼拝でこの主イエスの言葉が読み上げられるのを聞いた最初のころの教会の教会員たちは、主イエスがお語りになったこれらのこと一つ一つを本当に自分のことだとして聞いたにちがいません。

この主イエスの言葉は、実はわたしたち日本のキリスト者にとっても、意外に身近なことであると思います。自然災害、戦争はいつの時代でも誰もが直面します。日本はこの 80 年、国としては戦争はしていませんが、他の国の戦争が全く無関係とはいきません。何らかの形で影響を受け、そして関わっています。また、日本も戦争の準備が必要だ、と、それこそまことしやかに語られるようになっていきます。迫害についても、16 世紀の伝来以来、明治時代、第二次世界大戦まで日本でもキリスト者は公に迫害され、また人々から疎まれ、奇異な目で見られ、嫌がらせをされ、家族から明に暗に信仰生活を阻まれるという

形で迫害されてきた歴史を持っています。現在の日本では公の迫害や、目に見える暴力的な迫害はないかもしれませんが。それでもなお、わたしたちは信仰を保つために、信仰生活を続けるためには、さまざまな形での信仰の戦いが必要だと思わされることがあります。

「人に惑わされないように」、ということ主イエスがもう一つ、直接おっしゃっているのは、「私の名を名乗る者が大勢現れ、『私がそれだ』と言って、多くの人を惑わすだろう」ということです。当時、どうやら本当に「わたしが救い主イエスだ。」という人が何人も現れたようです。「偽キリスト」というのは新約聖書に登場します。(現代にもいたわけですが)。そういう人間でないにしても、「救い」という意味であるなら、わたしたちの周りにもいろいろなものが「これこそ救いだ」という顔をして惑わしてきます。お金は聖書の時代からいつも救い主のような顔をし、わたしたち人間を惑わして間違った道に誘いこんできました。今だって、といますか、今こそお金がすべてだと言われる時代だといえるでしょう。先ほどの、「日本も戦争ができるように準備しなければいけない」という論調もそうです。「自分たちは外国から狙われている。」そう偽情報をばらまくだけで、「だから準備をしないとイケない。戦争に反対する人たちは、攻撃されても反撃しないのか。それは国を危険にさらそうとしているのだ」ということがまかりとおるようになります。これはナチスドイツの最高幹部が言っていたことですが、今でも通用してしまう現実があります。言ってみれば「攻撃に対抗するのは軍備、そのための法的整備」そういうことが救いなのだと言うのです。世界が終わるとまでは言わないにしても、自分の生活が壊されてしまう。そう思い込むと、人のことはどうでもよくなり、自分を守るためにお金に走り、他人を攻撃し、戦争すらも正しいことだと思うようになるのが人間なのかもしれません。けれども、主イエスは、そういうことは世の終わりではない。確かに産みの始まり、終わりの始まりかもしれないけれど、決定的なことではない、とおっしゃいます。

最も大切なこととして主イエスは「あなたがたは自分のことに気をつけていなさい」とおっしゃいます。「それよりも」と言ってもいいと思います。「戦争、争い、天変地異、飢饉。それよりも自分のことに気をつけなさい」と。あなたがたに本当の危機が訪れる。「あなたがた」とは、わたしたち教会のことです。主が何より心配してくださったこと、それは教会が世に憎まれることだとおっしゃるのです。神を憎み、神を信じる者たちを憎むような世に、教会は生きてきたし、今も生きているのです。けれども、主イエスはここで話を大きく転換なさいます。総督や王の前に立たされてすべきことは、釈放を願うことでも、まして棄教することでもない、それどころか自分の正しさを主張することでもないのです。そうではなくて「証し」をするのだ、とおっしゃいます。確かにペトロもパウロも権力者に捕まった時に弁明以前にしたことは主イエスを証しすることでした。けれども、迫害で逮捕などされて一体なにを証しとして話せばいいのでしょうか？なんとかこの場をとりつくりつて釈放してもらおう、どこまで妥協していいのだろうか、というのがわたしたちの考えそうなことです。主イエスはそこで、まるでわたしたちの考えをすべてご存じかのようにおっしゃいます。「連れていかれ、引き渡されたとき、何を言おうかと心

配してはならない。」。繰り返しますけれど「あなたがた」とは教会のことです。世が教会に手を伸ばしてきたとき、教会には語る言葉がある、聖霊が言葉を与えてくださる、そう主は励ましてくださいます。いえ、世が教会に手をかけなくても、教会にはいつでも語る言葉があります。聖霊が語ることを示し、聖霊ご自身が語られるのですから、わたしたちは語らないわけにはいきません。

ではその語るべきこととは何でしょうか。教会が語ること、それは主イエスご自身のことにはほかなりません。この第13章の一連の教え、説教の後、主イエスは捕まってしまいます。ユダヤの指導者に引き渡され、総督の前に立たされるのは主イエスご自身です。神の子であるはずが自分を救えずに十字架にかかってしまった。人から見れば、父によって死に渡された子、それは十字架の主イエスにほかなりません。主イエスご自身が、世の憎しみを一身に受けて、十字架につけられたのです。けれどもこの主イエスの十字架こそが救いです。神に反抗し、神を無視し、神と向き合わずに生きようとして、かえって戦争を起こし、偽情報をばらまいて人を惑わしてしまうような、そしてそれらにふりまわされて、人を傷つけてしまうようなわたしたちの罪を、主イエスがすべて引き受けてくださった。そのことで罪が赦されて生きることができる。このことを教会は語るようにと、神から務めをゆだねられています。教会がかたるべきことは10節にあるように、「こうして、まず、福音がすべての民に宣べ伝えられなければならない」ということです。神がはっきりと、強い意志をもって、この福音の宣教の務めを教会にお与えになりました。主イエスを通して、聖霊によって語らせていただけるのだ、と励ましてくださいます。この主の励ましによって「最後まで耐え忍ぶ者は救われ」ます。神殿が崩れようが、戦争が起ころうが、地震が起ころうが、迫害を受けようが、それどころか天地が滅びる日がいつか来るとしても、主イエスの福音に固く立ち、この福音を宣べ伝える。これが教会の務めであり、同時にわたしたちが、惑わされず、振り回されずに生きる道に違いありません。

これからも主の日ごとに礼拝によって恵みのみ言葉をいただき、主の福音によって確かな歩みを、福音を宣べ伝える歩みを続けたいと思います。